

## 「科学する心」を育てる

鳥取県立倉吉総合産業高等学校  
校長 松本清治  
(中部こども科学まつり実行委員長)

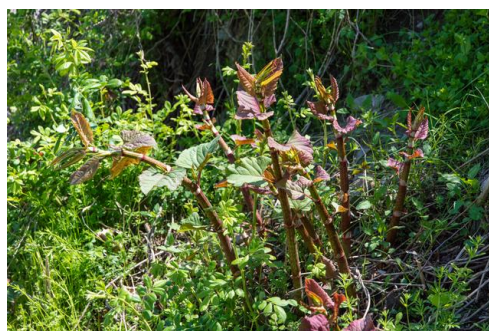
昭和30年代が私の少年時代でした。

小学校(分校)へは、下駄やタングツ(ゴム製の靴)で通学をしていました。学校から帰ると、おやつなどありませんでしたので、新聞紙に塩を包んで、田んぼに行き、あぜに生えているシンジャ(スイバ)や河原のカッポン(イタドリ)に塩を付けて食べていました。夏には魚やズガニをとり、秋にはアケカ(ミツバアケビ)やアケビ(ムベ)を採って食べていました。冬になれば、くぐり罫をしかけ、鳥を捕ることもありました。食べるものは、自然の中から採る。それがその当時の考え方でした。また、メジロを捕るために、おとりのメジロをかごに入れ、トリモチを枝に付けて、何時間もじっと隠れて待ったこともありました。近所の子どもたちと一緒に遊ぶ中で覚えていきました。回りの野山が遊び場だったのです。



シンジャ(スイバ)

縄文時代の住居跡が多く存在するところでもあったため、山の畑には、たくさんの土器の破片がありました。土器の破片を集めるのがおもしろくて、肥料袋に半分ほど集めて、持って帰るのが大変だったこともありました。テレビは、10軒に1台くらいしかありませんでしたので、見たければ、ある家に見せてもらいに行くのが当たり前でした。こんな時代でしたから、自然とどうつき合うか、人と一緒に行動する時はどうすればよいか自然に身につけていました。



カッポン(イタドリ)

野山で遊ぶ時は、危険も潜んでいます。蜂に刺される、蛇にかまれる、カヤで手を切る。しかし、これらのことを体験することによって、どうすれば防げるかも分かってきます。五感も鋭くなってきます。感性も磨かれてきます。楽しい思いだけでなく、辛い思いをすることによって、また失敗することによって、次はもっと上手にしようと思うようになります。次第に工夫する心や不思議だと思ふ心も芽生えてきます。

「科学する心」とは、このように楽しい事や辛い事、失敗の体験がつくり出すものではないかと思ひます。体験により、感性が磨かれ、不思議だと思ふ心が芽生えてくると、それを解決しようといろいろ考える、調べる、やってみる、そして納得する。その繰り返して人は成長していくのだと思ひます。現在の子どもたちに、私の育った環境をもう一度与えることはできませんが、体験の場や、考える場面をつくることはできます。体験、失敗をどんどんさせて、「科学する心」を育てる環境をつくっていきましょう。(写真：PIXTA)



アケカ (ミツバアケビ)